

いたずらムジナ

むかし、むかしな、江戸時代の中頃の話だ。小山の横町にコンコンチキナのコン吉さんというあだ名の人がいたという。そのあだ名のようなきつね面ではなく、まん丸顔で、でっかい図体をしていて、いつもにこにこしていたという。草相撲の大関を張っていて、しこ名を狐川と言うんだと。

ある日、この人が、お宮の裏山で、古ムジナを捕まえたんだと。その首を麻縄で結わえて、裏庭に飼っておいたんだと。朝、昼、晩と、餌をやり、「狐とムジナは同類だ。」と言いながら、棒切れでつついてかわいがっていたと。ところが、なにしろ力持ちなのでムジナの方では痛くてしょうがなかった。そこである夜、ムジナは、麻縄を噛み切って、逃げてしまったんだと。紺吉は、あちこち探しまわったがムジナは見つからなかった。

二、三日たったある晩、お宮の神主さまが訪ねてきたと。そして、毎晩、お宮に木を盗みに来るものがあると言った。このままでは、まわりの木がなくなって、お宮が丸裸になると言う。そこで紺吉は、明日とは言わず、今夜中に盗人を捕まえてやると約束したんだと。

真夜中を過ぎて、紺吉は、櫓の棒と麻縄を持って、お宮の境内をまわったが、盗人はどこにもいなかった。社務所の戸をトントンと叩いたが、起きて待っているはずの神主さまは、なかなか出てこない。

「こんな刻限に何事じゃ」と言いながら、やっと、神主さまは起きてきたと。紺吉の言い分を聞くと、「おまえ、キツネに化かされおったな。ははは。」と大笑いしたと。

神主さまは、朝から腹痛を起こして、一日中寝ていたと言った。そこで訪ねてきた神主さまは、ムジナが化けたのだとわかった。神主さまに化けるような古ムジナは、何をするかわかったものではない。すぐに、退治しなければなるまいと紺吉は思ったんだと。紺吉は、盗人を捕まえるつもりだったが、今度は、ムジナを捕まえることにして家に帰ったと。

その日の夕方、近所の人を呼び集め、ムジナがまた現れるのを待つことにした。

夜も更けて、戸をトントンとたたく音がしたと。そこで、雨戸をがらりとあけると、ムジナがいたんで、櫓の棒で撲って捕まえた。そして、皆で相談して、明日、ムジナ鍋にして食べてしまおうと、四つ足を縛って、軒先にぶら下げたんだと。

朝になると、ムジナはいなくて、縄だけがぶらさがり、紙切れがあった。それには、こう書いてあったと。

コンコンチキナのコンキチさん
いたずらムジナにだまされて
腹立ちまぎれのムジナ鍋
煮られぬ先に、はいさようなら

その後、ムジナは姿を消してしまい、近所で変わったことは何も起こらなかったということだ。